

都留市史

通史編

小山田氏の 元久二年(三〇五)の畠山重忠の謀叛や建保元年(三三三)の和田乱もこのような文脈のなかにあ
 都留郡入部 る。内乱時に主力軍団の一つであった平姓秩父党を率いた畠山父子がやぶれた二俣川合戦の交
 名のなかには敗軍のなかに櫛谷四郎・稲毛三郎らの名前がのせられている。これらと平姓小山田氏は同族で、
 『甲斐国志』は小山田有重に三子があつて上記二名と小山田五郎行平は兄弟である、としている。行平も当然反
 乱の側にあつて推測できないではないが、承久乱(三三三)時の東山道軍の従軍武士のなかに小山田太郎の名があ
 り、あきらかに甲斐・信濃の軍団の一翼となつている。都留郡の小山田氏の始まりについては、『甲斐国志』・
 『小山田氏略系図』の記事を援用しながら行平が畠山乱時に山峡に逃れて都留郡に入り開祖となつた、小山田太
 郎は行平の子である、というのが通説である。これを反証する新史料もないわけであるが、典拠とする両史料が
 新しすぎる。はっきりしているのは、承久乱時に甲斐国の郡内地方になんらかの諸職をもつ独立した武士として

小山田太郎が入部していたことである。そしてその地は多分、古代郡郷制の多良(田原)郷域と推定される。そ
 の規定は一つには、つぎに述べる和田乱後の勲功録による。『吾妻鏡』によれば、敗軍の古郡氏の遺領の初狩川
 沿いにあつたとおもわれる波加利本庄については武田冠者、同新庄については島津衛門尉、古郡は加藤兵衛
 尉、……、へとなつている。大まかにいって都留郡の郷をなぞっているが、これは当時の郡内地方の状況をよ
 く反映していると考えられる。古代から中世にかけての日本の農業の生産拠点は、戦国期から近世にかけての時
 期ほど転換していない。古代の生産拠点をしめす郷は鎌倉時代にあつても依然として拠点であつてその一部は荘
 園となり他の場合公領として多くの場合郷名も引きつがれていった。郡内地方の場合、最大の生産拠点の一つで
 あつたと推定される多良(田原)郷の存在に注目したい。小山田氏は後々ここを本拠地としているのである。即
 ち、畠山乱の一件とは無関係にすでに武蔵の小山田荘を本拠とする武士団の一部が独立した御家人として市域に
 入部しており、その根拠としたものは郷地頭であつた、としてよいのではあるまいか。いま一つ加えれば、小山
 田行平・太郎を親子とし行平を開祖とする説は系図に信頼性が乏しく、議論としても無理がある。時期的にみて
 も承久乱に独立した武士として甲斐国の守護の催促に応じて出陣したものとおもわれる小山田太郎を、都留郡小
 山田氏の起点として掲げたい。

和田の乱と 建保元年(三三三)に和田乱が起こつた。幕初以来くり返されてきた、有力武士団に対する幕府機

都留郡 構・北条氏方の執拗な挑発と反発する武士団の暴発という経過は同じであつたが、今度の場合は
 張本とされる和田義盛は一個の武士団の長というよりは軍事故権である鎌倉幕府全軍を象徴する武將と見なされ
 ていた。和田氏は鎌倉の後背地を本拠地としており、与党の範囲も大きかつた。しかし、自目的には本家筋に当
 たる三浦氏は動かなかつた。ここでも、一方で血縁・血盟を重要視する武士団が他方では独立した御家人は独立

した政治的行動をとる姿を見ることができるといえる。戦闘は鎌倉市中で行われ大激戦ではあったが和田氏側の全面的な敗北で終わった。和田方に武蔵・相模の名族横山党に属する武士が大挙して加わっている。惣領横山時兼が和田義盛の姻族だった故にとされているが、単なる和田・北条の私闘でないことは相模川流域や武蔵南部の武士達が集中的に鋒起していることから明らかである。甲斐国都留郡の古郡保忠もその中にあった。この反乱は鎌倉初期では最大でしかも勝利したこれ以後の北条氏の専制権力を約束するものだっただけに、乱後の誅罰も徹底していた。「古郡左衛門尉（保忠）の兄弟は甲斐国板東山波加利の東競石郷二木（大月市初狩）で自殺」したという。『吾妻鏡』の死者の交名に保忠とやらんで「同五郎、同六郎」以下の名がある。これと関連すると思われるが、承久乱の宇治合戦で打ち取られた甲斐国関係の武者の一人として古郡四郎の名をあげている。和田乱で敗死した者の兄弟かとの推測も可能である。やはり古郡氏もまるごと滅亡したのではなかった。

古郡保忠の遺領配分についてはほかに知りうることもある。さきにも少し触れたが、保忠の遺領としては波加利本庄・同新庄のほか、古郡・岩間・福地・井上の郷名が記録されるだけで具体的な権利関係はわからない。おそらく古郡氏は本拠地の古郡郷から福地（大月市鳥沢）さらに支流の笹子川・葛野川（先）の比定に当てはめれば賀美・征茂郷）については開発領主としての諸権利をもっていたものとおもわれる。その直接的勢力が桂川上流の都留市域方面には及んでいないことも読みとることができる。この史料の記載からみて波加利庄については皇室御領（長講堂領）の荘官諸職であることは間違いないが、他の郷名を書きならべたものはいわゆる郷地頭・郷司に関連する権利であろう。この配分によって波加利本庄の地頭職は武田氏惣領の武田冠者（信光）に宛行われた。信光は承久乱時の東山道軍の大將軍でもあった。はっきりした文書史料のうえからは国中の武田氏の勢力が郡内地方に入ってきたはじめということになる。武田氏族は鎌倉時代を通じて新しい分立をくりかえす。

波加利庄についての伝領関係は不明の点がおおいが、少なくともこれが武田氏関連の郡内地方進出の拠点となった形跡はない。ただ長講堂領波加利庄自体は室町時代中期の応永一二年（四三三）の時点でも「年貢未定」の荘園として記録されている。一方、古郡氏の本拠地は加藤景長に宛行われた。景長は源頼朝の郎党で梶原景時滅亡時に連座して失脚した景簾の息である。これ以後土着して屈曲を経ながらも、長く戦国時代まで郡内地方の有力な政治勢力となっていく。福地郷を宛行われている「鎌田兵衛尉」は内乱期の勇士として『保元物語』で有名な正清ではなく、その遺領を相続した息女かその縁者であるに違いない。福地郷比定の下鳥沢（大月市富浜町堀内）には館社の遺構もある。

以上のような治承・寿永内乱期から鎌倉前期にかけての郡内地方の状況は、承久乱の戦後処理をもって一応のゆきぶりの時期が終った。川下の武蔵横山党の一族に属しながらも、「根生い」の武士団として活躍した古郡氏は滅んだ。それ以後は、都留市域を中心に上流部の小山田氏、上野原町域を中心として下流部に加藤氏が御家人ないしはそれに近い存在として上級権力とのパイプ役となって並立している。文書史料には登場しない谷戸ごとの小領主は未だ水面下にあった。鎌倉末期までは、郡内地方の相対的な安定期であったようである。